



Title	帆足万里『修辞通』の江戸時代写本の翻刻および解説
Author(s)	黒田, 秀教
Citation	懐徳堂研究. 2022, 13, p. 27-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93502
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

帆足万里『修辞通』の江戸時代写本の翻刻および解説

黒田 秀教

一、解説

帆足万里は安永七年（西暦一七七八）、九州豊後国日出藩の家老を父として生まれ、懷徳堂の中井竹山の高弟である脇愚山に学び、寛政十年（西暦一七九八）二十一歳の時には父の伴をして大坂に上り竹山より直接教えを受けている。また皆川淇園、亀井南溟からも教えを授かったことがあり、更に西洋学術を独習しては窮理の学を探求して三浦梅園と親しく交わるとともに、中井履軒の学問を尊崇していた。内藤湖南は履軒の影響を受けた学者として、帆足万里を挙げている。^① 長く藩校致道館において教授していたが、天保三年（西暦一八三二）、日出藩の財政立て直しを期待されて五十五歳にして家老に就き、見事に藩政を立て直すものの、天保六年（西暦一八

三五）には家老を辞し、以後は学究及び後進の育成に専念した。弘化四年（西暦一八四七）に突如脱藩上洛をするものの翌年に帰藩、嘉永五年（西暦一八五二）、七十五歳にして没す。

万里の著述としては、自然科学を論じた『窮理通』が日本の近代前夜における科学史を語る際に注目されてきた。万里は少壮期に書いた『窮理通』を破棄して後年改めて執筆し直したのであるが、少壮期の『窮理通』と同時期に書かれたのが漢作文について論じた『修辞通』である。

この『修辞通』は、文化七年（西暦一八一〇）八月の万里識によると「長者の遺教」を記したとあり、具体的には中井竹山の所説であろうことを筆者は別稿にて論じた。^② そして、同識語にあるように、万里が同好の士に閲覧を赦していたことから『修辞通』の写本が広まるので

あるが、弘化三年（西暦一八四六）の識語に今後は秘蔵する旨が述べられている。その後、明治十三年（西暦一八八〇）に万里の嫡養子である帆足亮吉が弘化三年版に基づいて活字本として刊行し、これが大正十五年（西暦一九二六）の『帆足万里全集』に収録されている（全集本）。

『修辞通』の梗概については既に万里三世の孫に当たる帆足図南次が紹介しているが、江戸時代の写本と明治以後の刊本とは内容に異同があり、しかのみならず江戸時代の写本も大別して二つのテキスト系統に分かれていることは、筆者が気付くまでは見落とされてきたようである。『修辞通』の改訂に伴うテキスト系統の問題は別稿において論じたが、本稿は『修辞通』改稿について、一つの要点になっている获生徂徠の扱いに注目して解説しつつ、江戸時代の写本を翻刻公開することで、今後の万里研究に寄与せんとするものである。

まず、本稿において言及する『修辞通』写本について、系統に整理して掲げる。

〔中井本系統〕

○大阪大学附属図書館蔵、懷德堂文庫（新田文庫）『修辞通』

以後、新田本と呼称。

○関西大学所蔵、泊園文庫『修辞通』
以後、泊園本と呼称。

〔福沢本系統〕

○白杵市教育委員会蔵、福沢家旧蔵典籍『修辞通』、文化十二年（西暦一八一五）写
以後、福沢本と呼称。

○関西大学所蔵、内藤文庫『修辞通』
以後、環翠園本と呼称。

○日出町歴史資料館・日出町帆足万里記念館蔵、松田春子委託『修辞通』

以後、松田本と呼称。

○東京家政学院大学蔵、大江文庫『修辞通』、嘉永六年（西暦一八五三）写

以後、大江本と呼称。

中井本系統は、文化七年十一月付の脇愚山序が附される以前のテキストを伝えたもので、大江本がこの系統のテキストを校勘に利用して「中井本」と呼称している。『修

『辞通』の最初期稿であり、この系統に属する写本が懷徳堂に伝えられていた。

福沢本系統は、文化七年十一月付の脇愚山序が附された以後のテキストである。これに幾度か修正が加えられ、矢野穀卿の注が附された後、弘化三年版においてテキストの改訂が施され、この弘化三年版が明治時代の刊本へと繋がっている。即ち、今日において参照される『修辞通』の直系のルーツと言える系統である。

『修辞通』は、中井本より福沢本に至る時と、後に刊本として刊行されることになった弘化三年版との、計二度の大きな改訂が行われている。中井本より福沢本に至る改訂は本文が全二十五段から全三十九段に増訂され、漢作文例が附録されるというものであったが、本文の増訂はこの時のみであり、弘化三年版における改訂より大掛かりなものになっていた。

一連の改訂において注目されることとして、荻生徂徠に対する言及の変遷が挙げられる。万里は少壮期の節記『肄業余稿』において、日本人の漢文としては荻生徂徠と中井竹山とを双壁にしているが、⁽⁵⁾『修辞通』における徂徠の扱いにはテキストの改訂に伴う変化が確認でき、そこに或る傾向が見て取れる。

徂徠に対する評価の変化が顕著に見て取れるのが、第

十五段と第二十九段とである。今、順に見てゆこう。

〔新田本 第十五段〕

後世學古文者、唯韓退之最巧、天才既高、工夫亦至、故後世體、須以退之爲首、但句法稍與古異、雖力量橫絶、無漢人澹宕之致、故不如直法漢文之爲愈也、本邦人作文又不可不讀、本邦前修之文、所以取材鑄辭之法、求合彼邦也、本邦之文徂徠最巧、但天資雖高、功少精熟、用語尠雜、和習間見、未免後人指摘、叙事最拙、觀集中所載三紀事可見也、蓋雜用左氏史漢體、紕繆尤多、唯峽中紀行稍巧、乃爲後世故也、至取材鑄辭之法、猶可以備闕也、

〔福沢本 第十五段〕

後世學古文者、唯韓退之最巧、天才既高、工夫亦至、故後世體裁、須以退之爲首、但句法稍與古異、雖力量橫絶、無漢人澹宕之致、故不如直法漢文之爲愈也、本邦作文又不可不讀、本邦前修之文、所以取材鑄辭之法、求合彼邦也、本邦之文徂徠最巧、但天資雖高、功少精熟、用語尠雜、至取材鑄辭之法、猶可以備闕也、

『全集本 第十五段』

後世學古文者、唯韓退之最巧、天才既高、工夫亦至、故後世體裁、須以退之爲首、但句法稍與古異、雖力量橫絶、無漢人澹宕之致、不如直法漢文之爲愈也、

第十五段では、漢作文の範となる名文家を挙げ、その論評をしている。新田本では、韓愈が挙げられた後に、日本人の漢作文も読むべきであるとし、そこで日本最高峰の文章家として徂徠が挙げられる。但し、徂徠は才能こそ高いものの文の巧さにおいて精熟しておらず、用語も繁雑であるとされる。更に、和習の問題や諸家の文体を混用している点などの欠点もあったとした上で、しかしながら『峽中紀行』は上手に書いているので後世の手本になると言う。

それが福沢本では、日本人の漢作文も読むべきであるとして徂徠に言及し、徂徠の才能及び巧さに関する論評までは新田本と同様である。しかし、より込み入った和習や文体についての言及は削除され、模範とすべき作品『峽中紀行』についての言及も無くなってしまっている。そして全集本になると、日本人の漢文に関する言及そのものが無くなり、徂徠に関する言及は完全に消えてしまうのである。

徂徠に対する言及が後退してゆく現象は、第二十九段も同様である。

『新田本 第二十九段』

于鱗學古、不可入漢、論其品格、不能及子固介甫、可與子由介甫異類相配、本邦物徂來間有駁瘡、比于鱗稍劣、仍在獻吉之上、中郎學東坡小品、專務嬉戲、雖云和暢、不足以爲法、此皆以古文言、如時文稍馴雅者、彼邦儒士皆無不巧也、

『福沢本 第二十九段』

于鱗學古、不可入漢、論其品格、不能及子固介甫、本邦物徂來間有駁瘡、比于鱗稍劣、仍在獻吉上、此皆以古文言、如時文稍馴雅者、彼邦儒士皆無不巧也、

『全集本 第二十九段』

李于鱗學古、不可入漢、論其品格、在子固介甫之下也、

新田本では、漢土の李于鱗は古文を学んでおり、品格では曾鞏（子固）・王安石（介甫）には及ばないとしつつ、蘇轍（子由）・王安石と類は異なるが匹敵すると評価し

た後、日本の俎徠を李于鱗の下、李夢陽（献吉）の上と論評する。そして復び漢土の袁中郎について、蘇東坡に学ぶも戯文を専らにしており、文章の法の手本としては物足りない」と評し、今挙げた人物は皆な古文を学んでいるが、漢土の儒者で巧みならざる者はいないとしている。これが福沢本では袁中郎に対する言及が削除され、更に全集本になると李于鱗は曾鞏・王安石に及ばずとするのみになってしまうている。

このように三種のテキストを並べてみると、新田本では錯綜していた構成が整理されてゆき、最終的には俎徠が姿を消してしまった経緯が一目瞭然である。

もっとも、全集本において俎徠の名が全く挙げられぬ訳ではなく、第三・二十二・二十七・二十八段において言及されている。即ち、第三段では初学者の参考書として俎徠『訳文筌蹄』が挙げられ、第二十二段では俎徠の漢作文学習法が紹介されており、万里は俎徠第一の方法である唐音の学習こそ批判しこれを斥けるが、第二の方法である入門の時期に日本式の読法に親しむことは有効であるとし、これを詳述している。そして第二十七段は漢土・日本の名文家が等級付けされ、新井白石が第一等とされるのに対し俎徠は第二等の中に登場する。ところが第二十八段における等級付けに白石の名は見えず、第二

グループに属する俎徠が日本人としては最上位になっている。

この全集本における俎徠の扱いを整理すれば、漢作文の入門者にとって、日本の訓読に親しむという俎徠の学習法は参考にし得るものということになり、漢作文の教育家としての俎徠は一貫して高く評価されている。

問題になるのは俎徠の文章に対する論評であり、一見すると矛盾しているように見える第二十七・二十八段の記述も、評価の基準に留意すれば万里の意が見えてくる。第二十七段において「其の気軒爽、其の才飘逸」なる者が白石ら第一等、「其気雄壯、其の才奇傀」なる者が俎徠ら第二等とされる。第二十八段では、文章家について「才気は元もと天稟に由るも、文の巧拙に至るは、則ち又た此れに在らず」、「天資稍や劣ると雖も、工夫絶到すれば、則ち斉整温厚、風味窮まる無く、躋りて上等に居らざること能はず」と述べた後、「精熟」に基づいて文章家を等級付けし俎徠は第二グループに分類されている。これを要するに、俎徠は天賦の才こそ卓越しているものの、研鑽に欠ける点があり、よって総合評価としては最上位には据えられぬということになる。

この全集本の俎徠評は、新田本・福沢本の第十五段における俎徠評とも合致しており、俎徠の文章に対する万

里の評価は、根本部分では少壮期より晩年に到るまで一貫していたと言えよう。但し、新田本では『峽中紀行』という具体的作品名を佳作として紹介しており、徂徠の文章を範にして学習することが強く想定されている。一方、全集本の徂徠評は、日本の読法に親しむという入門者の学習方法こそ参考になるとされ、教育者としての徂徠は確かに高評されている。しかし、作品は参考とするには足りないとする地位に低下せしめられており、文章家としての徂徠に対する評価が後退してゆくことが見て取れよう。

なお、かかる万里の徂徠に対する眼差しは、竹山に対するものとも連動しているように思われる。万里は文化七年に書き上げた少壮期の笥記『肄業余稿』において、竹山の文章は徂徠と並ぶ近時の双壁であり、精熟では徂徠に優るが規模の広大さについては劣るという評価をしている。ところが晩年の『西庵余稿』において、竹山の代表作である『逸史』の文章は巧みではないと毀つてゐる。嘗ては双壁と称えていた徂徠・竹山の文章について、晩年の万里は物足りないものを感じていたようである。すると弘化三年に至り、老境の万里が『修辞通』を隠匿することにした動機も臆げながら浮び上がってこよう。『修辞通』に説く漢作文論は、徂徠を源流とし、竹

山を経由して万里に受け継がれたものである。⁽⁸⁾しかし、何時の頃からか万里には徂徠・竹山の文章は色褪せて見えるようになってしまっていた。かくして万里は弘化三年識語において、若かりし日の作である『修辞通』を「今を以て之れを觀れば、妄謬居ること半ば」と述べ、秘匿することにしたのである。

注

- (1) 内藤湖南『先哲の学問』履軒学の影響（『内藤湖南全集』第九卷、筑摩書房、昭和四十四年）、四四三頁。
- (2) 黒田秀教「中井竹山に見る懷徳堂の漢作文——達意を軸として——」（『新しい漢字漢文教育』第六十八号、令和元年）。
- (3) 帆足図南次『帆足万里』（人物叢書、吉川弘文館、昭和四十一年）、四十二～四十七頁。同『帆足万里・脇 愚山』（叢書・日本の思想家33、明徳出版社、昭和五十三年）、三十四～三十八頁。
- (4) 黒田秀教「幻の中井履軒撰『修辞通』——帆足万里『修辞通』の懷徳堂文庫蔵写本について——」（『懷徳』九〇号、令和四年）。
- (5) 帆足記念図書館編『増補 帆足万里全集』第一卷（ベリカン社、昭和六十三年）、五四八頁。
- (6) 『増補 帆足万里全集』第一卷、五四八頁。

(7) 増補 帆足万里全集 第一巻、六八一頁。

(8) 黒田秀教「中井竹山に見る懷徳堂の漢作文——達意を軸として——」。

二、江戸時代写本『修辭通』翻刻

〔凡例〕

一、底本は『福沢本』とした。

一、字体について、俗字・異体字などは正字に統一した。

一、本編段数は全集本に準拠し、長大である第十一段は適宜節を分けている。なお、段を示す【 】は筆者が附したものである。

一、【 】は全集本と相異していることを示す。

【協愚山序文】

題修辭通⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

夫文章者、蓋亦一難事、予固無所解、而時或自撰著、所謂不知而作之者、何其妄也、雖然既讀彼之書、豈容不考彼之言而修彼之辭耶、考焉而寡過、修焉而能得、其妄漸祛、鵬卿有是述、亦將利考之與修也、覽者其勉旃、

庚午仲冬

協長之

【第一段】⁽⁶⁾⁽⁷⁾

夫言人之所以宣意、言相錯成用、之謂辭、文者言辭之載于簡牘者也、凡人之技能、後世益巧、故其言亦古簡而今繁、簡則所含蓄者多、而意在言外、繁則所指道者悉、而意盡言中、是古今雅俗之所由生也、原古以治今則易、由今以⁽⁸⁾折⁽⁹⁾古則難、簡難明而繁易通也、言以載意、未通其言、而能通其意者、否也、其身不能言、而晰⁽¹⁰⁾言之情者、亦否也、豪傑之士、論學能⁽¹¹⁾剖⁽¹²⁾至道、往々失之目前者、不能文之過也、故學問之道、先治其辭、今我生斯邦、欲治異域難明之辭、不亦迂而難爲乎、是誠然、然吾邦之爲國、取教於唐、明倫治國、軍旅醫藥、百工技藝、少不資始於彼邦者、彼邦古典、乃教道所在、苟不通其辭、豈得⁽¹³⁾釋其意而無謬乎、是作文之所以貴於古也、語曰、言之不文、行之不遠、夫君子正衣冠、尊瞻視、時而後言、猶農以偏方鄙俚之言、則聽者不敬、行之不遠、不可以臨衆、是作文之所以貴於修也、此二者、學文者、不可不識也、

【第二段】

初學受句讀既通、略能解其義、輒當學屬文、欲學屬文、宜先讀西刻無和詰書、言語位置、各國殊別、和詰傍註、雖古人發蒙之巧也、讀者多⁽¹⁴⁾註⁽¹⁵⁾神和詰倒飛之際、語脉位置、一無所解、臨文茫然、不能措手、西刻書、顛倒詮釋、必

須自爲始通、積習之久、皆瞭然目下、然後舉用之、雖委曲難措語者、必皆隨手而集、故作文之與讀西刻書、互相助發、以俟文章成熟、數年之後、廣取書史讀之、必有破竹之勢、諸子百家之說、可不待師而明、

【第三段】

初學屬文、從其材高卑、須爲復文數十首、所謂復文、抄取經史中一節、數十字至百餘字、其宜和詰讀者、代以國字、漢音讀者、仍用漢字、一直寫下、從本邦語脉、國字數字關紐成一漢字者、促書成隊、仍每字間、施小垂針、一字成一漢字者、單寫異隊、而字代用國字天字、則字用列波二字、焉矣二字難譯、則其處施小圈、從上下文勢以安字、若蹇澁難讀者、字傍別註小國字以助之、使無與正文相混淆、漢字二字以上相連成正文者、亦字間施垂針、務在易辨識、每一章後、注共若干字、以便復成漢文時推考、既成、以授初學、其國字盡代填漢字、且使各復本位、以成漢文、與原文比較、正訛謬、以習用字、除和詰倒飛之習、此際但採譯文筌蹄、亦可助啓發、但才氣高者、不必事此、直學屬文亦可也。伊藤氏復文、漢音皆代用國字、本邦所傳漢音、混訛難辨、則老師宿儒尚難之、豈可以強初學乎、

【第四段】⁽⁴⁰⁾

復文起稿、宜用古文、多虛字幹旋、便於講明語脉、如後世稗史、多實字連用、則非所宜也、故吾儕起稿、多用孟子、其文明爽、且後生平常所誦習、易于啓發也、

【第五段】

學文宜先學敘事、不學敘事、其文必不能精熟、學敘事法、句論野史小說、日常事務、委巷叢話、皆譯以漢語、務使與事相當、不得鹵奔、文章法亦多端、有直筆、有婉辭、有遠而映之者、有逼而取之者、若不善議論、不識裁制、其敘事必有冗長不振之弊、必須兩者相發、以致筆下變化、然議論之文、非稍涉獵文史、胸中具小見識者、不能作也、

【第六段】⁽⁴⁵⁾

本邦學敘事、先務記作用語爲要、所謂作用語、如進退與奪類、詆訕實字而成用者、是也、其實字自可就前修所輯諸書檢求也、伊藤東涯名物六帖、僧焦中學語編類、是也、

【第七段】⁽⁴⁷⁾

言辭古簡而今繁、萬國皆無不然、而列國多以音定字、漢人獨以語定字、則勢不可得繁、而不能不繁、故後世有所謂疊字者、如恐懼憂愁、波濤山岳類、其實字義各有所

當、而在行文中、與用一字、全無區別、疊字尚書少見、蓋起周時、歌詩用之、永言之道、欲其調暢也、戰國以來、散文用之、故當作文時、宜下疊字、而單下一字、則必覺其少勻稱、此亦不可不識也、

【第八段】

文辭置句、位置前後、各國異構、在和文雅正者、猶或與唐異、況野史小說、尨雜不倫、若欲直取譯之、必有窒礙不通之病、法當取所譯書一誦、盡記其意、前者後之、後者前之、各以類相從、成章之際、務使暢達乃可、世說載、潘岳爲樂廣作表、取其語錯綜之、乃成名文、彼國談說入文、尚須錯綜、況吾邦乎、

【第九段】

文章瑕疵、不必須人指摘、多作乃自知、歐陽永叔此言、蓋欲人務多作也、文辭之學、雖有奇才、不多作必不能巧、西人猶然、況東方乎、時有善師、亦須從咨問以資啓發、亦不爲無裨、然務能多作、不必由師授、苟傲惰憚煩、不能多作、雖日提耳詔之、亦不能成也、

【第十段】

地名入姓名、及度量權衡、皆直書不得修改以求馴雅合唐

古制、官號勿論、王朝效唐制、置幕府及諸藩、近世所置字義略通者、亦不可改定也、

【第十一段①】

漢文二典尤古、其辭亦極簡質、二典以降、辭隨代變、至周周公所作詩書、皆窮其巧、以及洙泗之時、文辭大備、論語中庸樂記檀弓緇衣⁽³⁹⁾左傳諸篇可見也、洙泗之道衰、諸子百家興、各著書以言其道、教道已變、文辭從異、蓋古所謂文辭、侯伯相聘、及教訓衆以之、以禮與人交者、欲委婉雅飾、以德師衆者、欲溫厚含蓄、戰國以下、則尚議論服衆、即不能不以才氣加人、是古今文辭之異也、

【第十一段②】

自洙泗而後、辭隨代降、以至西漢之季、雖時有汚隆、人有巧拙均之爲古文、皆可以爲法、戰國之時、屈宋徒始作爲騷賦、騷賦古詩之一變者、以宏麗爲主、至漢益尚之、儷偶之風遂興、儷語古人亦有之、蓋事偶有相比者、舉言之耳、以言相應和、易悅人耳、騷賦尚之、至陸賈鄒陽淮南子⁽⁷²⁾中山靖王屬、散文中專用之、以至東漢、詩文法混淆不分、文辭大變、不可復以爲法、自東漢以降、亦辭隨變、漸趨華靡、儷偶益整、至齊梁唐初、委靡頹弱、略無可取、至史筆、雖不爲儷偶、句法局促、幾乎不能自明

其意者、

【第十一段③】

西漢以來、文人亦互相倣摹、然皆務諸俗、無學古者、古又偶有學古者、如漢武封□王策學書、是也。至唐韓退之、振八代之衰、銳意學古、柳子厚諸子、雖不必師事、要聞其風興者、故退之之治辭、使後世得由辭以繹道、功可次程朱論學、其於文誠爲振古英傑、但欲矯六朝剽竊釘餽之習、務去陳言、以自創作句爲事、故其用句、稍不與古同、然亦魯男子之學柳下惠、不爲不可也、

〔欄外〕自古又至書是也、宜分註、

【第十一段④】

從此以來、人初識古文爲貴、而皇甫湜樊宗師輩效之、尚造語艱深。幾至不可句、至宋其軋茁極矣、歐蘇以平易矯之、雖其才藻宏拔、至句法略無可觀、蓋取法於韓、不師古、又尚平易故也、加以程朱達意之文出、至明其冗長極矣、

【第十一段⑤】

李獻吉及王李屬厭之、盛唱復古、然不識琢句、不識古文有異體、雜取古書中成句、綴以成篇、名爲古文辭、譬

如書字、冠用鐘體、脚用王體、其他筆畫、用某氏體、偏索諸名家筆跡、摸以成一字、已則以爲極巧、傍觀固不耐其拘束、王李後、倣者雲興、人創一體、故文之扞亂、未有如明季之甚者、要皆□足以爲法也、

【第十一段⑥】

夫韓之去陳言、既出矯枉、且非本邦□學之所能、況文者之載簡牘者、事已與言相當、我焉得不用得其辭、學古文者、唯當觀體裁如何、至涉獵取材、當旁涉他書、況和人作文、元在以漢語譯和語、至鄙事末節、史漢中所無常、十四五、不能不從後世書史搜索、但造語爲巧者、不可蹈襲耳、

【第十二段⑦】

學古文、必以西漢以上爲法、然諸家各有其體、不可相通者、有過異者、句法有可互用者、有不可互用者、初學未易辨識、遽取倣之、則有緝繩以布之失、不如先以一家爲法、古文卷帙廣大、叙事議論俱備、可以爲法者、莫如左傳史記、左氏之文、法度冠冕、固在史記上、然以其上世簡妙之文、非可遽學且體雜辭命、氣聳辭修、行文之際、自有矩度、不得恣馳騁、以此叙事、必不免踟躕、且就後世書史、取材者、須再鎔鍊以就其法、亦非初學所能也、

馬遷之文、西漢絕品、精熟至極、舉莫與比、且自平常敘事而外、天文地理、樂律卜筮醫藥、莫不具備、故學古文、宜以史記爲、朝夕把玩、每舉一節、略令成誦、其於作文、必有奇進、班固漢書文稍降、亦可以補不足、然若不務多作、則能背誦一部史記、亦無益也、

【第十三段】

學史記既熟、上倣左氏諸子、下爲記勝尺牘、亦不難、猶書家既得用筆法、勿論羲獻、顏柳黃米、亦可摸學、不失其態度也、若夫時文紀事、唐人稍以文名者、皆無不巧、可以爲法、然記鄙事者、亦須略使其爾雅、如五雜俎類乃可、不可講求俗語、叢塞文中、如傳奇小說之文、極爲無益、俗語乃古言成細巧者、古言已明、可能不學而通其梗概也、若夫講明俗語、以通兩國之情、是譯師之學、非儒者之所事也、

【第十四段】

文章諸體、後世孳乳倍多、不啻十數、要不出敘事議論二端、後生學文、既致精熟、此等諸體、臨作取古人文體裁明密者數篇、讀過數四、即可起筆、不必一一學作、至體裁、韓柳以下、唐宋諸名家之作、皆可以爲法也、唯有韻之文、非學詩、必不能巧密也、

【第十五段】

後世學古文者、唯韓退之最巧、天才既高、工夫亦至、故後世體裁、須以退之爲首、但句法稍與古異、雖力量橫絕、無漢人澹宕之致、故不如直法漢文之爲愈也、本邦作文又不可不讀、本邦前修之文、所以取材鑄辭之法、求合彼邦也、本邦之文徂徠最巧、但天資雖高、功少精熟、用語尨雜、至取材鑄辭之法、猶可以備闕也、

【第十六段】

後世文有以儷偶爲體者、所謂四六文、是也、儷語句法齊整近詩、在吾邦稍爲易作、所難於古文者、字句長短中自有權衡均停處、初學不易曉耳、

【第十七段】

文章又有俳體、專以滑稽悅耳爲主、猶詩之有俳體也、原出東坡、明季袁中郎王百穀陳繼儒屬、專尚之、雖有風致可喜者、要非文章正體、決不可學、若夫紀行長篇、間出一排語、在此等文體、反不可少也、

【第十八段】

詩亦不可不學、然比文稍易、且吾學文者、以爲續學之方云爾、非求爲善文之人也、故今不論、欲學詩者、如胡元

瑞詩叢、辨論最詳、大抵詩主情、故欲其溫麗、文主理、故欲其暢達、東漢以來、以詩爲文、故文之理體喪矣、晚唐以來、以文爲詩、故詩之溫厚泯矣。

【第十九段】

書數醫卜、凡百技藝、皆有其家言、用語或同、所指各異、欲作此等文、各從其書求之可也、

【第二十段】

押韻、同音相應和、歌謠皆有之、本邦歌謠獨無韻者、疏於音故耳、故古文中、句法齊整、可諷誦者、多諧韻、漢魏尚然、及儷體已成、此風乃熄、蓋押韻即成騷賦故也、韓柳學古、間一有之、歐蘇少見、不修句也、至李王唱古文辭、時爲舉行也、古詩清廟諸篇、獨無韻、蓋清廟詩、一人唱之、三人和之、自相應和、不須隔句相應也、

【第二十一段】

古韻頗寬、或有平上去三聲通押者、蓋漢人語音雖清、其於音學亦疏、其交以象形爲主故也、後世傳梵音法、梁沈約創分四聲、後人遂立三百四韻、吟哇益嚴、毫不可踰、今行韻書、蓋宋禮部試士所用、如鵬字、今韻收四支中、唐人或在齊韻押、佳字今爲韻頭、唐人復在麻韻押、此類

與通行韻書異、至辭賦有韻之文、韓柳以下、唐宋大家、多從沈法、就有旁出、亦東冬真文、次序鱗次、不如古人間有雜押、意者古無韻書、徒取聲音諧美、地方之音、或有轉訛不同耳、本邦音學、全出摸索、不如從精嚴、庶幾少過也、且古人文賦、四聲概多互押、少一聲連押者、此亦不可不知、

【第二十二段】

物徂萊論蒙生授句讀法、以學唐音爲第一捷法、夫明四聲、正輕重清濁、固非唐音、不可、然寒鄉已苦無善師、且吾聞學唐音於長崎清、以中材之人、非經三年不成、今觀通唐音者、其文之紕繆自若、則作文之不與唐音也亦明、已能通唐音、又費數年之力以學文、則其靡棄歲月已甚、況學古文者、不欲目下西漢、恐爲後世陋習所漸漬也、韓退之以後至王李、皆無不然、學唐音者、必用俚言、先入淪骨、藥石非解、故譯家之文、偶有巧者、體格已卑、不足觀也、漢字以形爲主、苟通其意、其音不遺也、今吾輩所讀、自六經史子始、不爲陋習所漬、何幸如之、何必學異域鄙俚之言、而後爲學、非當止此也、本邦與唐土壤密邇、利涉非難、文明之化、設使人可與唐人對話、恐非國家立防之道、是余之所不取於唐音也、徂萊第二法、先從本邦讀法、授以四書孝經類、擇其中

易解一二句、時爲解說、日不過一二次、切勿說章旨及道德性命之說、大抵人心喜開通、惡閉塞、雖蒙生日誦、全無分曉語、必生厭想、厭想一生、情氣乘之、纔得可解者、輒踴躍精進、其一二碎義、積久合湊、必爲後來用力地、既而授以史漢有和詰者讀之、併授字書、以備搜索、不問其能解與不、倘未通曉、更讀二三遍、學者病在求從頭皆解、此雖似佳事、其心胸狹隘、不能優柔厭飫、非讀書器、切勿爲其解說、其所疑要蓄在胸中、積功已久、則自然水釋、又要指授其書體格、詩有詩體格、易有易體格、一知體格、思則過半、若高明道理、深遠旨趣、則隨資質高下造詣淺深、度其可及、時或一二冷語、忽然觸發、如時雨之潤、其學便進、百箇於諄々教誨者、此法極爲無弊、故今增損載於此、以爲授句讀法、

【第二十三段】

由上所舉法而學、十五六以上、才氣已發達者、得紀事百餘紙、雜文三四十首、詩二百餘首、讀書稱之、聰明之質、比三年、可以小成、中材倍之、至三倍、而止、則雖魯鈍下材、無不及穀、下材經九年者、比其成、書史涉獵略遍、併學術亦小成也、只如句讀、八九歲以上、可度易讀者授之、長後極省力也、

【第二十四段】

八九歲以上、初授句讀、不得過十餘字、讀數十遍過、務使盡記、別作小冊、注其所識字、至千字以上、則四子書、不待人授、略能自讀也、未及八九歲者、讀數遍則止、不欲其怠倦、於文籍生畏惡也、

【第二十五段】

人有才氣、才所以明理、氣所以成事、其在文辭、氣壯則俊、才明則周、唯文辭以明辨爲主、猶事業以壯厲爲主、故徒有壯氣、而其才不稱者、其辭拙朴、不足以發其氣、猶雖有美才、無勇者、臨事恆怯、不能有爲也、但文氣以俊逸爲主、不必其氣之厚薄、無見對而怯之之患、故以文辭言、則子建太白世無以加焉、至功業、曾不得中下、此文辭事功、才氣之異用也、

【第二十六段】

戰國以來之文、已讀其書、考其辭、其人之才氣、自可分別、洙泗之文、其辭整然以飾、其思穆然以幽、人々如出一、未易辨、禮樂之教能移性也、如杜甫詩、司馬遷文、天資俱在下等、而好尚既正、精熟至極、著作之妙、以漢唐詩文之盛、未見有出其右者、以彼則如彼、以此則如此、故君子學之爲貴也、

【第二十七段】

才氣高下、人々⁽²⁰⁾不同、猶其異面、不可得窮、今姑立爲四等、使後學有所考、其氣軒爽、其才飄逸、如曹子建李太白蘇東坡、本邦新井白石、是爲第一等、就中有逸氣稍減者、如諸葛孔明王勃程伯淳王陽明、本邦祇南海、是也、其氣雄壯、其才奇傀、如荀卿賈誼韓退之蘇老泉李獻吉、本邦物徂來⁽²¹⁾、是爲第二等、就中有才加明者、如孟子唐太宗張子厚朱子、是也、屈原柳子厚李于鱗亦次之、有才稍麗而氣不及者、鮑照劉禹錫謝翱、本邦秋玉山、是也、才雖麗而氣弱者、如司馬相如王粲王維蘇轍何景明袁中郎、本邦服子遷、是爲第三等、以比下第四等、雖云韶潤、反少骨氣、但稍早成、故以居上耳、有才思稍遲、精鍊之久、亦可入此等者、歐陽永叔、本邦伊藤東涯、是也、氣既不甚壯、才亦不甚麗、唯二者略相稱、可鍛鍊致上進、此爲第四等、莊周司馬遷班固杜甫、本邦梁蛇巖、是也、然第一等卑者、僅可比第二等、第二等高者、反可入第一等、但以其才氣相類、不能不各居其等、他皆倣之、周公在第一等、溫潤深遠、夫子之文辭、氣象宏遠、略如漢高、繹之徐見溫厚、皆不可律以尋常尺度也、四等之外、乃爲下材、然就其中、亦有差等、如王元美汪道昆、均之皆不及科者、然王之變化不羈、非汪所能及也、

【第二十八段】

才氣元由天稟、至文之巧拙、則又不在乎、雖有異質、功少鍛鍊、屈強疎鹵、無以盡其才、不能不降居下等、雖天資稍劣、工夫絕到、則齊整溫厚、風味無窮、不能不躋居上等、若論其精熟、則莊周孟子司馬遷韓退之歐陽修李于鱗是其最也、屈原賈誼司馬相如班固蘇洵蘇轍物徂來次之、荀卿東坡李獻吉又次之、佗由詩賦、論其才氣耳、其人蓋不致力於文之故也、時有古今、辭有降升、如其等級、又不可以此定也、

【第二十九段】

其等級、孟子齊整、稍似洙泗之文、精鍊過左氏而雅飾不及、各以其長、略可相敵、屈原騷賦、固極其巧、至九章等作、雖佳句錯出、頗覺生硬、蓋臨絕之音、不暇復致詳、亦戰國之妙品也、荀之才氣、莊之精熟、皆可亞屈子、西漢之文、賈誼以才氣勝、馬遷以工夫勝、皆漢文之絕品也、以爲法則賈不及馬、蓋才非可學、而精熟者、法度必森嚴也、相如賦尤巧、至散文、雖云敷腴、固少齊莊、不能及馬遷、韓退之學古文、力量橫絕、可入西漢、風韻逸宕、差遜馬遷耳、班固東漢之高者、叙事尤巧、可入西京、他文頗不稱、柳子厚學古、比西京少溫厚、亦班氏之亞也、歐陽學韓、自成一體、實宋文之妙品、三蘇

亦然、永叔之雅鍊、子瞻之才氣、略足相當、老泉豪宕亞之、子由恬澹又次之、如朱子文亦不爲不精熟、然學歐蘇意不在巧、故比歐蘇大劣、訓詁之文續匠、無以加焉、乃後世體之尤細巧者、于鱗學古、不可入漢、論其品格、不能及子固介甫、本邦物徂萊間有駁瘠、比于鱗稍劣、仍在獻吉上、此皆以古文言、如時文稍馴雅者、彼邦儒士皆無不巧也、

【文化七年識語】

余之於文、材質凡陋、曾不及中下、少辱長者指授、亦嘗刻意爲之、天資之所限、終不能巧、況此篇以達意爲主、蕪陋尤甚、然其所載、皆長者之遺教、平生奉以周旋者、不能自私、以告與余同好者、覽者無以其言之陋而屏棄之、幸甚矣、

文化七年秋八月 帆足萬里識

注

- (1) 『松田本』は表紙に、「卷末感狀記所載「復文起稿」之法三篇、及里巷鳴兒之取說者一章、原本不載、無由謄寫、異日得他原本、卒業完編、今暫編次爲一卷、俟他日完璧耳」とあり。
- (2) 『新田本』・『泊園本』は愚山序を載せず。
- (3) 『環翠園本』は欄外に、「矢野子詳、文章今古雅俗、袁中郎鐘

伯敬論之、甚詳、略與此說合、抱朴子以爲後世文章之義度越古之典謨、非通論也」と注す。

- (4) 『環翠園本』は「修辭通序」に作る。

- (5) 『環翠園本』は「祛」を「怯」に作る。

- (6) 『新田本』は題名を欠く。『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』は「修辭通」と題字有り。

- (7) 『環翠園本』は本節に「偏方鄙俚之言、猶之可也、撰排謹怒罵之語、以指擿人瑕病、誇示其能者、往々有之矣、蓋當構思運筆之時、紙上作何眉目、胸中作何通理、文而至于斯、吾道窮矣、」と注す。

- (8) 『松田本』は「言」を「在」に作る。

- (9) 『環翠園本』は「沂」を「泝」に作る。

- (10) 『新田本』・『泊園本』は「而能晰」に作る。

- (11) 『新田本』・『泊園本』は「能」字を欠く。

- (12) 『松田本』は「折」を「析」に作る。

- (13) 『新田本』・『泊園本』は「能」を「知」に作る。

- (14) 『松田本』は「乎爲」に作る。

- (15) 『新田本』・『泊園本』は「明倫治國」を「明人倫治國家」に作る。『大江本』は「一本作「明人倫治國家」」と注す。

- (16) 『泊園本』は「始」を「治」に作る。

- (17) 『環翠園本』は「彼邦」二字を欠く。

- (18) 『泊園本』は「解」を「詳」に作る。

- (19) 『松田本』は「欲學屬文」の句を欠く。
- (20) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』は「註」を「注」に作る。
- (21) 『泊園本』は「語」を「詰」に作る。
- (22) 『松田本』は「數年」を「數十年」に作る。
- (23) 『新田本』・『泊園本』は「子」を「氏」に作る。
- (24) 『新田本』は「抄」を「抄」に作る。
- (25) 『新田本』・『泊園本』は「至」字を欠く。
- (26) 『松田本』は「漢」を「謨」に作る。
- (27) 『泊園本』は「用」を「字」に作る。
- (28) 『松田本』は「焉矣」二字難譯、則其處施小圈、從上下文勢以安字、若塞」を欠く。
- (29) 『泊園本』は「傍」を「註」に作る。
- (30) 『新田本』は「註」を「注」に作る。
- (31) 『泊園本』は「上」を「字」に作る。
- (32) 『松田本』は「共」字を欠く。
- (33) 『環翠園本』は「代」字を欠く。
- (34) 『松田本』は「文」を「本」に作る。
- (35) 『新田本』・『泊園本』・『大日本』は「正心謬」を「正其訛謬」に作る。
- (36) 『新田本』・『泊園本』は「萊」を「來」に作り、『松田本』は「徠」に作る。
- (37) 『泊園本』は「學屬文」を「屬學文」に作る。
- (38) 『松田本』は「也」を「矣」に作る。
- (39) 『新田本』・『泊園本』は「伊藤氏」を「堀川氏」に作る。
- (40) 『新田本』・『泊園本』はこの段を欠く。
- (41) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大日本』は「句」を「勿」に作る。
- (42) 『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大日本』は「章」字を欠く。
- (43) 『泊園本』は「制」を「別」に作る。
- (44) 『泊園本』は「涉獵文史」を「涉文獵史」に作る。
- (45) 『新田本』・『泊園本』はこの段を欠く。
- (46) 『松田本』は「詒帥」を「諸師」に作る。『大日本』は「詒」を「語」に作る。
- (47) 『新田本』・『泊園本』はこの段を欠く。
- (48) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『大日本』は「而」字の下に「終」字有り。
- (49) 『松田本』は「宜」字無し。
- (50) 『泊園本』は「位置」の二字を欠く。
- (51) 『新田本』は「各以類」を「各使以類」に作る。
- (52) 『新田本』は「務使暢達」を「務欲其暢達」に作り、『泊園本』は「欲務其暢達」に作る。
- (53) 『新田本』・『泊園本』は「文辭之學」を「文章之道」に作り、

『大日本』は「文章之道」を並記す。

(54) 『環翠園本』は「能」字を欠く。

(55) 『新田本』・『泊園本』は「馴雅」を「雅麗」に作り、『松田本』は「訓雅」に作る。

(56) 『新田本』・『泊園本』は「唐」を「漢」に作る。

(57) 『新田本』・『泊園本』は「唐」を「漢」に作り、『新田本』は「一本唐」と注す。

(58) 『泊園本』は「及」を「乃」に作る。

(59) 『松田本』・『大日本』は「樂記檀弓緇衣」を「檀弓」に作る。

(60) 『泊園本』は「聘」字を欠いて空格有り。

(61) 『新田本』・『泊園本』・『大日本』は「帥」を「師」に作る。

(62) 『環翠園本』は欄外に「以婉麗概屈宋、恐未允、以相如當之、可也」と注し、又た「古文對句、不爲不多、但與後世駢儷異調耳、漢初陸賈文字、盛用儷語、加以韻字、蓋亦文章之一變」と注す。『松田本』は「一条目は見えず、二条目のみを「矢野子曰、古文對句、不爲不多、但與後世駢儷異調耳、漢初陸賈文字、盛用儷語、加以韻字、蓋又文章之一變」として注す。

(63) 『大日本』は「時」を「特」に作る。

(64) 『松田本』は「屈宋徒」を「屈宋之徒」に作る。

(65) 『泊園本』は「詩」を「時」に作る。

(66) 『環翠園本』・『大日本』は「宏麗」を「婉麗」に作る。

(67) 『松田本』は「以宏麗爲主」の句を欠く。

(68) 『環翠園本』は「至」字を欠く。

(69) 『松田本』は「語」を「偶」に作る。

(70) 『新田本』・『泊園本』・『大日本』は「以言」を「以其言」に作る。

(71) 『新田本』・『泊園本』は「陸賈」を欠く。

(72) 『松田本』は「子」字を欠く。

(73) 『松田本』は「變」を「辭」に作り、これをミセゲチす。

(74) 『福沢本』は破損す。『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大日本』は「代」字に作る。

(75) 『新田本』・『泊園本』・『大日本』は「局促」の下に「彪亂」の二字有り。

(76) 『環翠園本』は欄外に「訛俗二字、事後之論也、然古人竟不得辭其名也」と注し、又た「王莽非奸雄也、狗鼠小人也、言之汚口、先生豈忍使門下諸居子朝夕諷誦其名乎哉、弘竊惜焉、史記有三王策之文詞義炳然、可以爲擬古之冠冕、晉書夏侯湛傳、載擬尚書文、然亦稍近兒戲」と注す。『松田本』は一条目のみを「又曰」として注記し、二条目は見えず。

(77) 『環翠園本』・『松田本』・『大日本』は「二」を「三」に作る。

(78) 『新田本』・『泊園本』は「如漢武封三王策學書」を「如王莽詔其學書」に作り、『大日本』は「一本、王莽詔、其」と注す。

(79) 『環翠園本』・『松田本』・『大日本』は「古又」より「是也」に至るまでを割注とす。

- (80) 『松田本』は「要」を「惡」に作り、圈点を附す。
- (81) 『新田本』・『泊園本』は「使後世得由辭以繹道」を「使後世由辭以得繹古道」に作り、『大江本』は「道」のみを「古道」に作る。
- (82) 『新田本』・『泊園本』は「竊」を「賊」に作る。
- (83) 『新田本』・『泊園本』は「自創」を「創自」に作る。
- (84) 『松田本』は「此」を「是」に作る。
- (85) 『環翠園本』は「至」字を欠く。
- (86) 『新田本』は「然」の下に「句」字有り、「句」字、疑衍文」と注す。
- (87) 『新田本』・『泊園本』は「不識琢句」の句を欠く。
- (88) 『松田本』は「有」字を欠く。
- (89) 『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「句」を「語」に作る。
- (90) 『新田本』・『泊園本』は「鐘體」を「鐘絲體」に作る。『環翠園本』は「鐘系絲」に作り、「系」恐「索」字」と注す。
- (91) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「王體」を「索靖體」に作る。
- (92) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「某氏體」を「二王體」に作る。
- (93) 『泊園本』は「偏」を「偏」に作り、『松田本』は「編」に作る。
- (94) 『泊園本』は「耐」を「能」に作る。
- (95) 『福沢本』は破損す。『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「不」に作る。
- (96) 『福沢本』は破損す。『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「初」に作る。
- (97) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「文者之」を「文者言之」に作る。
- (98) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「得」字を欠く。
- (99) 『松田本』は「觀」字を欠き、小圈を挿む。
- (100) 『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「元」を「本」に作る。
- (101) 『松田本』は「常」字を欠く。
- (102) 『泊園本』は「爲」を「無」に作る。
- (103) 松田本は前段と分けず。
- (104) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「不」を「有」に作る。
- (105) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「綿」を「錦」に作る。
- (106) 『環翠園本』は「俱」を「但」に作る。
- (107) 『新田本』・『泊園本』・『松田本』は「非可遽」を「非遽可」に作る。
- (108) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「聘」を「聘」に作る。
- (109) 『松田本』は「西漢」の下に「之」字有るも、小圈点を附す。

- (110) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「舉」を「學」に作る。
- (111) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「爲」の下に「法」字有り。
- (112) 『新田本』・『泊園本』は「不足」の下に「也」字有り。
- (113) 『新田本』・『泊園本』は「記」を「紀」に作る。
- (114) 『松田本』・『大江本』は「義」を「義」に作る。
- (115) 『松田本』は「皆」の上に「亦」字有り。
- (116) 『新田本』は「五雜組類」を「西陽五雜組」に作り、「泊園本」は「西陽五雜組」に作り、「環翠園本」は「五雜組屬」に作り、「松田本」は「五雜組屬」に作り、「大江本」は「西陽五雜組屬」に作る。
- (117) 『泊園本』は「講」を「構」に作る。
- (118) 『松田本』は「古言」の下に「乃」字有り。
- (119) 『松田本』は「可」を「不」に作る。
- (120) 『松田本』は「明」を「習」に作る。
- (121) 『新田本』・『泊園本』は「若夫講明俗語、以通兩國之情、是譯師之學、非儒者之所事也」の句を欠く。
- (122) 『環翠園本』は「數」を「類」に作る。
- (123) 『環翠園本』は「數」を「類」に作る。
- (124) 『松田本』は「四」を「回」に作る。
- (125) 『環翠園本』は「一一」を「一々」に作る。
- (126) 『泊園本』は「古文」を「古人」に作る。

- (127) 『泊園本』は「才」を「材」に作る。
- (128) 『新田本』・『泊園本』は「裁」字を欠く。
- (129) 『新田本』は「本邦」以下を分けて一段とす。
- (130) 『新田本』・『泊園本』は「本邦」を「本邦人」に作る。
- (131) 『新田本』・『泊園本』は「老雜」の下に、「和習問見、未免後人指摘、叙事最拙、觀集中所載三紀事可見也、蓋雜用左氏史漢體、紕繆尤多、唯峽中紀行稍巧、乃爲後世故也」の句有り。
- 『松田本』は「老雜」の下に「不太訓雅」の句有り、「大江本」はこれを「不太馴雅」に作る。又た、『大江本』は『新田本』・『泊園本』の記述を補記し、「以上、一本あり。『不太馴雅』の四字なし」と注す。
- (132) 『新田本』・『泊園本』は「有」の上に「又」字有り。
- (133) 『松田本』は「四六」を「六四」に作る。
- (134) 『新田本』・『泊園本』は「所謂四六文、是也」の句を欠く。
- (135) 『新田本』・『泊園本』は「作」を「爲」に作る。
- (136) 『泊園本』は「均」を「拘」に作る。
- (137) 『新田本』・『泊園本』は「文章又有俳體」を「和文家有所謂俳文者」に作る。
- (138) 『新田本』・『泊園本』は「有俳體也」の下に「漢文亦有俳體」の句有り。
- (139) 『新田本』・『泊園本』は「屬」を「等」に作る。
- (140) 『新田本』・『泊園本』は「專尚之」を「所爲是也」に作る。

- (141) 『松田本』は「亦」を「又」に作る。
- (142) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「續」を「進」に作り、『環翠園本』は「積」に作り、『松田本』は「續」に作る。
- (143) 『松田本』は「方」を「法」に作る。
- (144) 『環翠園本』は「云」字をミセゲチにす。
- (145) 『松田本』は「詩」を「語」に作る。
- (146) 『松田本』は「故」字を欠く。
- (147) 『泊園本』は「主」を「生」に作る。
- (148) 『環翠園本』は「厚」を「原」に作る。
- (149) 『松田本』は「音」を「韻」に作る。
- (150) 『松田本』は「疏於音」を「疎音」に作る。
- (151) 『大江本』は「諸」を「詩」に作る。
- (152) 『松田本』は「獨」を「猶」に作る。
- (153) 『環翠園本』は欄外に「元首股肱之歌、皇極敷言、商頌兼用韻之法、多與沈約類、降至楚騷漢賦亦然、想上古必有用韻、自然法存焉、後世竟不可曉、迨韓愈元和聖德詩、用韻漫然、古未見其比、弘常渭四聲調和之道、至唐末而絕響、爾後但據其模範而已」と注し、又た「文選諸賦及有韻之文、每遇韻換、意義節奏、亦隨而變者居多」と注す。『松田本』はこれを「矢野氏曰、元首股肱之歌、五子之歌、皇極敷言、商頌等用韻之法、多與沈約類、降至楚騷漢賦亦然、想上古有用韻、自然法有焉、後世存竟不可曉、迨韓愈元和聖德詩、用韻漫然、古未見其比、弘常渭四聲調和之道、至唐末而絕響、爾後但據其模範而已」とし、又た「又曰、文選詩賦及有韻之文、每遇韻換、意義節奏、亦隨而變者居多」とす。
- (154) 『新田本』・『泊園本』は「頗」を「極」に作る。
- (155) 『松田本』は「音」を「韻」に作る。
- (156) 『新田本』・『泊園本』・『松田本』は「疎」を「疎」に作る。
- (157) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「交」を「文」に作る。
- (158) 『松田本』は「世」字を欠く。
- (159) 『松田本』は「人」字を欠く。
- (160) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「三」を「二」に作る。
- (161) 『大江本』は「如」の上に「今」字有り。
- (162) 『松田本』は「爲」字を欠く。
- (163) 『新田本』・『泊園本』は「間有雜押」を「雜押無忌」に作り、『大江本』はこれを補記す。
- (164) 『大江本』は「訛」を「化」に作る。
- (165) 『新田本』・『泊園本』は「意者古無韻書、徒取聲音諸美、地方之音、或有轉訛不同耳」の句を欠く。『大江本』は該当句について「此以下、中井本ナシ」此以上」と注記す。
- (166) 『環翠園本』は前段と合わせて一段とし、又た欄外に「漢字以形爲主、苟通其意其音可遺也、確論所謂破天荒之一訣」と

注す。

(167) 『新田本』は「萊」を「來」に作り、『環翠園本』・『松田本』は「徠」に作る。

(168) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「清」を「者」に作る。

(169) 『新田本』・『泊園本』は「以中材之人、非經三年不成、今觀通唐音者」の句を欠く。

(170) 『新田本』・『泊園本』は「皆無不然」を「無不皆然」に作る。

(171) 『新田本』・『泊園本』は「偶」を「適」に作る。

(172) 『新田本』・『泊園本』は「也」字を欠く。

(173) 『新田本』・『泊園本』は「字」を「文」に作る。

(174) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「不」を「可」に作る。

(175) 『松田本』は「自」字を欠く。

(176) 『松田本』は「邇」を「通」に作る。

(177) 『松田本』は「人々」を「人人」に作る。

(178) 『新田本』・『泊園本』は「可」字を欠く。

(179) 『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「話」を「語」に作る。
(180) 『環翠園本』・『松田本』は「余之所不取」を「余之所以不取」に作り、『大江本』は「余所以不取」に作る。

(181) 『新田本』・『泊園本』は「萊」を「來」に作り、『環翠園本』・『松田本』は「徠」に作る。

(182) 『松田本』は「勿」を「無」に作る。

(183) 『新田本』・『泊園本』は「日」の下に「但」字有り。

(184) 『新田本』・『泊園本』は「厭想一生」の句を欠く。

(185) 『環翠園本』は「厭想」二字を脱し、「厭想下、恐脱厭想二字」と注す。

(186) 『新田本』・『泊園本』は「纔」を「僅」に作る。

(187) 『新田本』・『泊園本』は「碎義、積久」を「零碎」に作り、『大江本』は「新田本」・『泊園本』の記述を「一本」として附記す。

(188) 『松田本』は「爲後來」を「後來爲」に作る。

(189) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「併授」を「副以」に作る。

(190) 『松田本』は「問」を「同」に作る。

(191) 『松田本』は「在」字に点を附す。

(192) 『新田本』・『泊園本』は「積功已久」を「積以卷數」に作る。

(193) 『新田本』・『泊園本』は「則」字を欠く。

(194) 『松田本』は「釋」を「解」に作る。

(195) 『大江本』は「體格」を「格體」に作る。

(196) 『新田本』・『泊園本』は「明」を「妙」に作る。

(197) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は上文の「造詣」を欠く。

(198) 『新田本』・『泊園本』は「冷語」の下に「微言」二字有り。

(199) 『環翠園本』は「諄々」を「諄諄」に作る。

(200) 『松田本』は「爲」字を欠く。

- (201) 『松田本』は「損」字を欠く。
- (202) 『松田本』は「者」字を欠く。
- (203) 『松田本』は「首」を「紙」に作る。
- (204) 『泊園本』は「材」を「才」に作る。
- (205) 『松田本』は「雖」を「虽」に作る。
- (206) 『大江本』は「可度」を「度可」に作る。
- (207) 『新田本』・『泊園本』はこの段を欠く。
- (208) 『環翠園本』・『松田本』・『大江本』は「遍」字を欠く。
- (209) 『新田本』・『泊園本』は「其」字を欠く。
- (210) 『松田本』は「才」を「材」に作る。
- (211) 『環翠園本』は「不必」二字に紙片を貼ってこれを消す。
- (212) 『新田本』・『泊園本』は上の「之」字を欠く。
- (213) 『松田本』は「患」を「愚」に作る。
- (214) 『新田本』・『泊園本』は「焉」字を欠く。
- (215) 『新田本』・『泊園本』は欄外に「此以下評論品定古人文章、其言孔高、遽示初學、蓋非其宜也、愚意竊謂是別爲一篇、待其學稍進以助啓發、可也、未知高明以爲如何」と注す。
- (216) 『環翠園本』は「人々」を「人人」に作る。
- (217) 『新田本』・『泊園本』は「資」を「質」に作る。
- (218) 『松田本』は「俱」を「但」に作る。
- (219) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「有」字を欠く。
- (220) 『環翠園本』は「人々」を「人人」に作る。
- (221) 『松田本』は「窮」を「究」に作る。
- (222) 『泊園本』は「姑」を「始」に作る。
- (223) 『新田本』・『泊園本』は「王陽明」の下に「袁小修」の名有り。
- (224) 『松田本』は「雄」を「勇」に作る。
- (225) 『環翠園本』・『松田本』は「來」を「徠」に作り、「大江本」は「萊」に作る。
- (226) 『新田本』・『泊園本』は「才加明」を「氣加俊」に作る。
- (227) 『泊園本』は「如」字を欠く。
- (228) 『新田本』・『泊園本』は「而」字を欠く。
- (229) 『新田本』・『泊園本』は「鮑」の上に「如」字有り。
- (230) 『新田本』・『泊園本』は「照」を「昭」に作る。
- (231) 『環翠園本』は「第」を「弟」に作る。
- (232) 『新田本』・『泊園本』は「卑」を「低」に作る。
- (233) 『環翠園本』は「第」を「弟」に作る。
- (234) 『環翠園本』は「第」を「弟」作る。
- (235) 『環翠園本』は「第」を「弟」に作る。
- (236) 『環翠園本』は「第」を「弟」に作る。
- (237) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「夫子」の上に「如」字有り。
- (238) 『松田本』は「之」字を欠く。
- (239) 『新田本』・『泊園本』は「皆」字を欠く。
- (240) 『新田本』・『泊園本』は「下材」を「無才者」に作り、「大江

本」は「無才」に作る。

(241) 『松田本』は「其」字を欠く。

(242) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「皆不及科者」を「無才者」に作る。

(243) 『新田本』・『泊園本』は「羈」を「滯」に作る。

(244) 『環翠園本』は前段と合わせて一段とす。

(245) 『新田本』・『泊園本』は「資」を「質」に作る。

(246) 『松田本』は「窮」を「究」に作る。

(247) 『新田本』・『泊園本』は「李于鱗」の下に「袁中郎」の名有り。

(248) 『新田本』・『泊園本』は下の「蘇」字を欠く。

(249) 『新田本』・『泊園本』は「物徂萊」を「徂來」に作り、『環翠園本』は「徂徠」に作り、『松田本』は「物徂徠」に作る。

(250) 『泊園本』は「佗」を「他」に作る。

(251) 『新田本』・『泊園本』は「由」を「就」に作る。

(252) 『泊園本』は「降升」を「外降」に作る。

(253) 『新田本』・『泊園本』は「屈子」の下に「其所爲當時體也」の句有り。

(254) 『環翠園本』は「馬」の下に「遷」字有り。

(255) 『新田本』・『泊園本』は「非」を「不」に作る。

(256) 『新田本』・『泊園本』は「而」字を欠く。

(257) 『新田本』・『泊園本』は「韓退之」を「韓」に作る。

(258) 『松田本』は「文」字を欠く。

(259) 『新田本』・『泊園本』は「頗」字を欠く。

(260) 『松田本』は「溫」を「緇」に作る。

(261) 『大江本』は「班」を「斑」に作る。

(262) 『泊園本』は「亞」を「次」に作る。

(263) 『大江本』は「鍊」を「鍛」に作る。

(264) 『松田本』は「又」を「亦」に作る。

(265) 『松田本』は「爲」を「易」に作る。

(266) 『新田本』・『泊園本』は「焉」字を欠く。

(267) 『大江本』は「子」を「子」に作る。

(268) 『新田本』・『泊園本』は「介保」の下に「可與子由介甫異類相配」の句有り。

(269) 『新田本』・『泊園本』は「萊」を「來」に作り、『環翠園本』・『松田本』は「徠」に作る。

(270) 『新田本』・『泊園本』・『大江本』は「在獻吉上」の下に「中郎學東坡小品、事務嬉戲、雖云和暢、不足以爲法」の句有り。

(271) 『泊園本』は「獻吉上」を「獻吉之上」に作る。

(272) 『泊園本』は「之」を「文」に作る。

(273) 『松田本』は「之」字を欠く。

(274) 『新田本』・『泊園本』・『環翠園本』・『大江本』は「能」を「敢」に作る。

(275) 『新田本』・『泊園本』は「之」字を欠く。

〔附記〕 本稿は、令和三年度明石工業高等専門学校「教育研究活性化経費」研究プロジェクト「帆足万里『修辭通』の成立過程——江戸時代の写本調査——」（代表者…黒田秀教）の成果の一部である。